

初対面会話における日本語母語話者の話題選択と会話展開の可視化

—母語場面と外国人留学生との接触場面の比較を通して—

許 明子(名古屋大学)

1. はじめに

本研究は日本語母語話者（以下、日本人学生）が母語話者同士の初対面会話と、外国人日本語学習者（以下、外国人留学生）との初対面会話において、どのように話題を選択し、どのように会話を展開させているのかについて分析し、日本語母語話者間の初対面会話と外国人学習者との初対面会話における話題選択と会話展開にどのような相違点と類似点があるのかを明らかにすることを目的としている。

分析データは、日本の大学に在学している2名の日本語母語話者を対象に実施した女性同士の母語話者間の会話データと、両名がそれぞれ同大学に在学している外国人留学生（女性同士）と行った会話データ、以上の3本の会話データである。外国人留学生は日本語を専攻として学んでいる上級レベルの日本語学習者であり、日本語による自由会話には全く支障を感じない日本語力を有している。これらの会話データについて、話題の下位分類を行うと共に、話題間の関連性の観点から話題転換と会話の流れを図式で示して会話展開を可視化した。話題選択と会話展開の可視化に基づいて、日本人母語話者間の初対面会話と外国人留学生との接触場面の初対面会話において話題選択と会話展開にどのような相違点が見られるのかについて考察する。

2. 先行研究

本研究における「話題」とは、三牧(2013)を参考にし、雑談での話題を「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」と定義した。話題内容の認定については、筒井(2012)による話題内容の変化に着目した認定基準を導入して、質的異なりを話題区分の判断基準として話題を区切る手続きを行った。話題は下位話題を持った内容的に階層的な構造を示すことが多いことから、最も包括的な話題を「大話題」、その下位話題として「中話題」、さらに「中話題」の下位話題を「小話題」として区分する(図1)。

(1) 話題内容の質的異なりを判断する基準(筒井 2012 : 39)

- 1) それまで話題となっていた対象や事態とは異なる、新しい対象や事態への言及
- 2) すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及
- 3) すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及
- 4) すでに言及された対象や事態について、それと同種の対象や事態への言及
- 5) すでに言及された個別の対象や事態の一般化

会話展開の可視化は、村上・熊取谷(1995)によるトピックの展開構造の図式化を参考に、時間の流れに沿って話題選択と会話の展開を図式化した。話題間の関連性の観点から冒頭話題との関連を基準にして、「派生話題」「上位話題への復帰」「再出話題」「新出話題」に分類し、会話の流れに沿って会話の展開を可視化した。時間の流れを横軸に、関連性を持つ派生話題を縦軸にして、下記の図2のように会話の展開を可視化した。

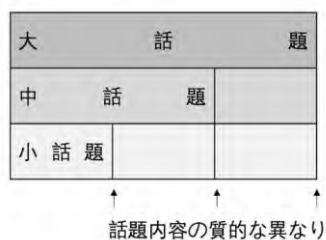


図1 話題の区分方法

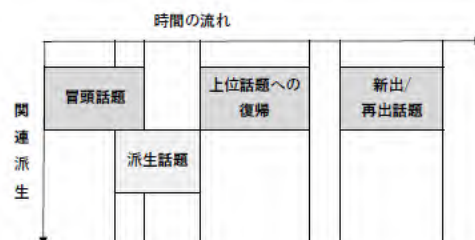


図2 話題間関連性からみる会話展開の流れ

また、本研究は村上・熊取谷(1995)、朱 (2020) を参考に、冒頭話題との関連性を基準に話題を派生話題、再出話題、新出話題、上位話題の復帰に分類する。

表1 話題転換タイプの定義

話題転換のタイプ	定義
派生話題	直前話題と派生関係にある話題
上位話題の復帰	中間に1, 2 話題 (多くは脱線した内容) 挿入され、元の話題に戻る場合
再出話題	先行話題と同じ内容の話題が複数の話題を経て再導入される場合
新出話題	先行話題のどれとも関連しない話題

朱 (2020) の分類を参考に作成

以上の手続きに従って、日本語母語話者が接触場面と日本語母語話者との母語場面の会話においてどのような会話展開を見せたのかについて比較分析を行う。日本語母語話者の初対面会話における話題転換の様相については田中 (2023) で多角的な指標から分析を行っている。田中 (2023) によれば、日本語母語話者の話題転換の特徴として、話題の内容の関連性の観点から発展話題を導入する傾向が強く、発展話題では自分話題を導入する割合は高くなく相手話題を中心に展開しながらも自分から情報や意見を提供したり、相手に同意・教官を求めたりといった複数の方法で話題を展開している可能性があるとして述べている。本研究では日本語母語話者の母語場面だけではなく接触場面での会話展開を分析することによって、さらに日本語母語話者の話題選択と会話展開の特徴が明らかになると期待される。

3. 調査概要及び結果

本研究では、2名の日本語母語話者がそれぞれ初対面の中国人・韓国人日本語学習者と行った会話と、日本語母語話者間の初対面会話の3本の会話データを文字化して比較分析を行った。それぞれの会話データの詳細は表2の通りである。

表2 会話データの詳細

	会話参加者	会話時間
接触場面①	日本人学生 K : 中国人留学生 Z	31分 21秒
接触場面②	日本人学生 W : 韓国人留学生 S	37分 24秒
母語場面	日本人学生 K : 日本人学生 W	36分 47秒

これらの会話データについて前章で述べた話題の区分方法と会話展開の手続きに従って可視化した結果を下記の図3、図4、図5に示す。図3と図4は接触場面①と②、図5は母語場面の会話データである。可視化図の中で話題提起者を色分けして示したが、図3と図4の日本人学生 (KさんとWさん) を青色、外国人留学生を赤色の枠で示した。



図3 接触場面①の話題区分と会話展開の可視化



図4 接触場面②の話題区分と会話展開の可視化

下記の図5は母語話者間の会話データを可視化したもので、日本人学生Kさんを青色、日本人学生Wさんを赤色で色分けして示した。

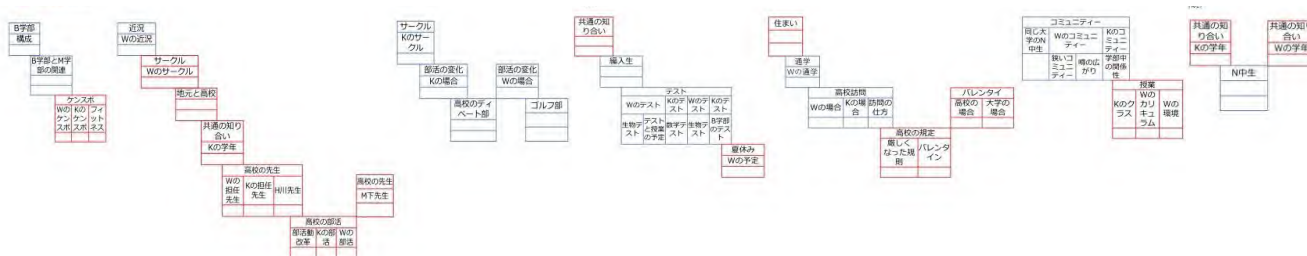


図5 母語場面の話題区分と会話展開の可視化

次章で可視化の結果に基づいて話題選択と話題転換の観点から考察を行う。

4. 考察

4.1 話題選択

3つの会話データの可視化した結果を話題選択と話題提起者についてまとめると表3のようになる。

表3 話題選択と話題提起者

	接触場面①		接触場面②		母語場面	
	留学生Z	日本人K	留学生S	日本人W	日本人K	日本人W
大話題数	15		23		29	
大話題提起者	8	7	13	10	15	14

(単位：回)

大話題数は接触場面①で15、接触場面②で23、母語場面で29の話題が選択されており、母語場面が最も話題が多く、多彩な話題が選択されていたことが分かる。大話題提起者を見ると、接触場面①では大話題が15回選択されているが、外国人留学生Zが8回、日本人学生Kが7回の話題提起者となっている。接触場面②では23回の大話題が選択されているが、外国人留学生Sが13回、日本人学生Wが10回の話題提起者となっていることから、接触場面の会話では外国人留学生のほうがやや多くの話題を選択しており、会話全体の内容に影響を与えた可能性がある。それに対して、母語話者間の会話では29の大話題が選択されているが、日本人Kが15回、日本人Wが14回で、両者が同程度の大話題を提起していた。表3で分かるように、日本人学生Kは接触場面においても母語場面においてもバランスよく大話題を選択して提起していることが分かる。

話題転換については次節で考察するが、日本人学生Kが参加した接触場面①と母語場面の会話では関連する話題に派生する会話展開だったのに対して、日本人学生Wが参加した接触場面②では大話題数が多いが、関連する話題への派生が少なく、大話題間の結束性が弱い。もちろん接触場面における会話相手との相互行為による違いはあると思われるが、日本人学生Kのほうが接触場面でも母語場面でも関連性のある話題を選択しながら会話を展開していたことが分かる。話題数と話題転換の関係については次節で考察する。

4.2 話題転換

3つの会話データの可視化に基づいて大話題間の関連性、話題転換のパターンについて分析した結果を表4にまとめる。

表4 話題転換パターン

	接触場面①		接触場面②		母語場面	
	留学生Z	日本人K	留学生S	日本人W	日本人K	日本人W
冒頭話題	4		9		7	
派生話題	4	6	5	7	9	9
上位話題への復帰	1	-	2	-	2	1
再出話題	1	-	5	2	5	4
新出話題	7	7	6	10	10	10

まず、冒頭話題数は接触場面①で4つ、接触場面②で9つ、母語場面で7つ提起されており、接触場面②のほうが多彩な

話題が選択されているように見える。しかし、話題転換には接触場面①と②を可視化した図3と図4で違いが確認できる。接触場面①は図3で示したように、冒頭話題が4つで、そのうち外国人留学生Zが3つの冒頭話題を選択し、日本人学生Kは1つの冒頭話題を選択していた。日本人学生Kは外国人留学生Zが提起した冒頭話題を、それに関連する派生話題へと話題転換させながら会話を展開していた。それによって接触場面①は話題間の結束性が高く、大話題から派生話題や上位話題への復帰が展開しており、結果的に複雑な階層をなしながら会話が展開していることが分かった。一方、接触場面②は図4で示したように、外国人留学生Sが6つの冒頭話題を提起し、日本人学生Wが3つの冒頭話題を提起するが、冒頭話題から関連話題へと派生は会話前半に限定的に見られ、会話の後半になると冒頭話題から派生話題への転換が見られず、話題間の結束性が弱くなっている。話題間の結束性が弱くなると会話の流れが断絶し、会話展開が細切れ(村上・熊取谷1995)のような印象を与える。

一方、母語場面では7つの冒頭話題が選択され、日本人学生Kが4つ、日本人学生Wが3つ提起している。図5の母語場面の会話展開の可視化から分かるように、冒頭話題からKとWの両者が共に派生話題、上位話題への復帰の話題転換を見せており、複雑な階層をなして会話が展開している。特に、日本人学生Wは接触場面②では上位話題への復帰の話題転換が見られなかったが、母語場面では派生話題だけではなく、上位話題への復帰、再出話題も見られ、接触場面とは異なる会話展開を見せていた。

以上のように、日本人学生2名は、接触場面と母語場面での話題選択と話題転換において異なるパターンを示していることが分かった。日本人学生Wは接触場面では留学生Zが選択し提起した大話題に合わせるパターンの話題転換が多く接触場面では冒頭話題から派生話題へと話題転換がうまくできなかつたが、母語場面では派生話題が増え、上位話題への復帰、再出話題も見られており、接触場面と母語場面で異なる会話を行っていることが分かった。一方、日本人学生Kは接触場面と母語場面の両方とも、相手が選択し提起した冒頭話題について関連する派生話題に転換したり、上位話題への復帰、再出話題、新出話題の選択等の話題転換のパターンを示していた。日本人学生2名とも接触場面と母語場面における発話量と大話題選択においては相手と同じ程度であったが、会話展開においては異なる特徴を示していたことが分かった。

田中(2023)で指摘されているように、日本語母語者は話題の関連性の観点から発展話題を導入する傾向があると述べられているが、本研究における会話データでも母語場面で話題の関連性がある派生話題を選択し展開している傾向が見られた。しかし、接触場面では関連する派生話題への転換がうまく進められず、母語場面とは異なる特徴があることが分かった。本研究は2つの接触場面と1つの母語場面の会話データのみを分析しており、会話データが十分とは言えない。今後、さらに対象を広げて調査を行うことと、今回の会話参加者を対象に定期的に会話調査を実施し、初対面以降の会話における話題選択と会話展開の分析を課題としたい。

5. まとめと今後の課題

本研究では、日中、日韓の接触場面と日本語母語話者間の3組の女性同士の初対面会話の調査を実施し、話題選択と話題転換パターンについて可視化を通して分析を行った。その結果、接触場面と母語場面において話題転換の仕方に相違点が見られた。特に、冒頭話題として大話題が提起された後、関連する派生話題への転換において相違点が見られ、日本人学生Wは接触場面では派生話題の展開がうまく進められなかったことが分かった。

今回の会話調査は初対面同士の会話場面であり、特に接触場面では話題選択と話題転換において影響があった可能性が否定できない。今後はこれらの3組のペアが定期的に会話を行うことによって話題選択と話題転換パターンがどのように変化するかについて追跡調査を行いたい。

参考文献

- 花村博司(2014)「日本語の雑談会話における話題転換研究の方法—話題転換はどこで行われ、どう分類されるか—」『言語文化学研究(言語情報編)』9, pp. 71-99. 筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』, くろしお出版。
三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析』, くろしお出版。
村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, pp. 101-111。
田中奈緒美(2023)「多角的指標から見た日本語の話題転換の様相—女性二者間の初対面雑談会話の分析から—」『日本語教育』185号, pp. 62-76
朱怡潔(2020)「話題間関連性の観点から見る話題開始表現の使い分け」『国語学研究』(59), pp. 213-227